

在籍した開設10年までの 神戸親和女子大学大学院との関わりを振り返って

Looking back on my involvement with
Kobe Shinwa Women's University Graduate School up to 10 years

荒木 紀幸*

Noriyuki ARAKI

<要旨>

この小論では、荒木が神戸親和女子大学大学院に所属した8年間と本大学に赴任することになった経緯などを振り返るために兵庫教育大学時代も含め、資料をたどった。本学での活動を次の5項目に分類して考察した。「事項」では、大学院担当教授、大学院入学生の動向、博士課程構想、等を取り上げ、次いで、「本学での学会開催」を、さらには、大学院が提供した「教育講演会・学会開催時の講演」についてまとめ、「院生の学会参加」を整理した。なお、ここでの院生は主に荒木ゼミを対象としている。また、「院生合同研修会、見学会」等について、別項目で整理した。以上について、考察した。

Key Words : 大学院開設 東北師範大学 国際交流 交換留学生 学会開催 教育講演会 学会発表

1. はじめに

筆者は神戸親和女子大学大学院の発足に伴って、2002年から文学研究科修士課程教育学専攻の非常勤講師として登録され、神戸親和女子大学と係わるようになった。この2年後の2004年3月に兵庫教育大学を早期退職し、4月より神戸親和女子大学教授として、大学院教育に本格的に参加した。こうして7年後の2011年3月に定年退職を迎え、その後1年間客員教授を務め、開学10周年を迎えた2012年3月に規定により本学を退職し、今日に到っている。

この度、大学院研究紀要編集委員長の吉野俊彦先生より、開学20周年を迎えるに当たって、元教育学専攻主任として在籍した当時の大学院の様子などについて語って欲しいとの執筆依頼を受けた。私が神戸親和女子大学大学院にどのように係わり、院生たちとどう向き合ったかについて振り返ってみるよい機会を頂いたと思い、お引き受けすることにした。

2. 神戸親和女子大学に採用されるまで

(1) 兵庫教育大学時代を振り返る

1980年、現職教員のための新構想の大学院大学、兵庫教育大学の開学に伴って、1981年に宮崎大学教育学部から兵庫教育大学に転勤になったこと^{注1}で、私の研究に大きな転機がおとづれた。それは、筆者

にとって全く未知の新しい研究ジャンルであるコールバーグ理論に依拠したモラルジレンマ道德授業の研究に本格的に取り組みたいと思うに到ったからである(筆者は学習心理学担当で赴任した)。

当時を振り返ると、「新しい酒は新しい革袋に盛れ(新約 聖書 —マタイ伝・九)」というたとえでないが、兵庫教育大学に赴任して、モラルジレンマ授業を研究の俎上にあげる環境がここには備わっていると実感するようになった。つまり、全く新しいタイプの道德教育の方法を、日本という教育風土で大きく開花させるためには、既存の体制下にある大学や小学校では十分に研究し、実践し、検討することは難しい。むしろ、新しく開学した現職教員のための兵庫教育大学大学院大学でこそ、このような研究を行う意義と価値がある。兵庫教育大学には、民主主義を背景に日本の学校風土に合ったモラルジレンマ授業を構築し、実証的にその効果を検討し、この授業を全国に広げるという無謀とも言える試みを可能にしてくれる人的環境や物的環境が、整っているのである。例えば、人的環境には、授業者として、また教材作成においても信頼のおける附属小学校の徳永悦郎教諭との出会いがあり、共同研究者としてコールバーグ理論に関心をもつ前田和利道德教育担当助教授の参加があり、ゼミ生の現職教員の大学院

* 本学大学院教育学専攻元教授、兵庫教育大学名誉教授

生が研究に参加し、何人かは修士論文としてコールバーグ理論に関連するテーマを取り上げた^{注2}、ことなど、三位一体の協働的な研究体制が作れたことがある。物理的環境においても、新しい施設や研究備品などが私たちの研究を支えてくれた^{注3}。

赴任して1年後の1982年から、教育方法講座の私の研究室では具体的な形で道徳性心理学の研究が始まった。研究生（現職院生、学部生）、附属小学校教官（道徳教育）、大学教官が新しいタイプの三位一体の研究協働体制（附属学校教員と現職大学院学生と大学教員との研究体制、道徳教育研究会）を築き、私たちは一体となって様々な研究活動が行った^{注4}。

表1は1980年代の主な活動を示したものである（荒木、2023）。1982年に1主題2時間のモラルジレンマ授業の実践を授業実践研究会（大阪大学）で初めて披露した。翌年には「モラルディスカッションのためのモラルジレンマ教材開発」を発表し、役割取得評定検査を作り、雑誌「道徳教育、明治図書」

表1 1980年の私たちの主な活動（荒木、2020を修正）

1982年	モラルジレンマ授業の研究を呼びかけ
1983年	吉田重郎氏が研究会を代表し、授業実践研究会（水越敏行阪大教授、梶田敏一助教授、西之園晴夫京都教育大学教授主宰）でこれまでの研究成果の発表をした。研究テーマ：コールバーグ理論に基づく道徳授業実践の研究 兵庫教育大学道徳研究会（前田和利、荒木紀幸、八重柏新治、徳永悦郎、畑耕二）兵教大モデル（1主題2時間のモラルジレンマ授業過程）を示し、実践を紹介した。
1984年	モラルディスカッションのための「モラルジレンマ」教材開発 文部省特定研究 荒木紀幸、前田和利（兵庫教育大学）、徳永悦郎、畑耕二（附属小学校）、吉田重郎、八重柏新治（荒木ゼミ院生）、と共同研究で、一連の授業は徳永氏によって行われた。 雑誌「道徳教育、明治図書」の誌上で、私たちのめざす道徳教育を公開。3月号、「討論のひろば」へ、疑問点を投稿。私たちの道徳教育の考え方について、10月号、「なぜコールバーグ理論なのか」
1985年	「討論のひろば」7月号、「モラル・ディスカッション」を通した子どもの変容 「討論のひろば」11月号、「ジレンマ資料づくり」 役割取得能力評定検査マニュアル（筑波大院生渡辺弥生さん資料提供） 荒木・武川彰 兵庫教育大学道徳教育研究会資料 スライド教材「まほう使いのプレゼント」「まほう使いのメダナ」コールバーグ原作；荒木・須之内千秋（訳） 荒木研究室資料 日本道徳性心理学研究会が誕生した（世話人代表、大西文行；世話人、岩佐信道、氏家達夫・高橋文司・内藤俊史・二宮克美・山岸明子・荒木紀幸）。 コールバーグ博士・ヒギンズ博士、10月13日の広池学園創立50周年記念文化講演会で来日。モラルジレンマ研究所で3回、7、9、12日に研究会を行なった。講演会では「普遍的道徳を求めて」を話された。研究会から、荒木・前田・吉田・野口の4名が参加。
1986年	改訂役割取得能力発達段階評定マニュアル 荒木・鈴木憲・野口裕展 兵庫教育大学道徳教育研究会資料 公平性発達段階評定検査マニュアル 荒木・武川彰 兵庫教育大学道徳教育研究会資料 「規範—基本判断」評定法を用いた道徳性の測定 荒木・八重柏新治・前田和利 兵庫教育大学紀要6巻、97-131。
1987年	中学生を対象としたモラルジレンマ教材と道徳の授業モデル 野口・荒木 兵庫教育大学紀要7巻、55-86。 道徳教育国際会議 モラルジレンマ研究所、に参加、824-27。（荒木、佐野、加賀、山根、林、隈元—兵教大院、鈴木・徳永・松本朗・岡田達也・日野正行） ワークショップ 「道徳性の発達段階評定法（ヒギンズ）、モラルジレンマを用いた討論授業の勧め方（ゴンパーク）、価値明確化の新しい試み（ハーミン）に参加。
1988年	スライド教材「キャットピープル」、第1部、第2部完成、 荒木・岡田、 荒木研究室資料 「道徳教育はこうすればおもしろい、荒木編」を北大路書房から出版、執筆者；荒木、大西文行、徳永、八重柏、武川、鈴木、奥村典保、宮田和恵、西村由利恵、三木美弥子、松本、山本逸郎、畑、吉田、野口、岡田、日野
1989年	モラルジレンマ資料を用いた小・中学校における道徳実践—ジレンマ資料とその構造、及び授業のための指導案— 荒木・徳永・山本逸郎・新垣千鶴子・岡田達也・加藤健志・永田彰寿・日野・畑・松本・吉田、学校教育学研究 第1号 105-133、 「道徳性の発達に関する研究年報 1989年度版」第1号を発行。その後、2003年の第15号まで継続発行（日本道徳性発達実践学会の発足をもって終了）。

誌上に、「私たちがめざす道徳教育」を投稿した。1984年、第1回夏期合宿研究会を開催した^{注5}。1985年には広池学園招聘でコールバーグ博士とヒギンズ博士の初来日があり^{注6}、講演会と研究会に参加した。



私たちの1主題2時間のモラルジレンマ授業の実践について博士に説明したが、先生はその実践をととても興味深いと喜ばれた。（写真、10.7。）



博士はプレゼントの法被をハッピーと洒落られた（京都吉兆で、10.19）

後日京都観光され夕食をご一緒しました。ハーバード大学に招待するよと言われ、再会を楽しみにお別れした。博士との再会を楽しみにしていたが、年明けて間もなくして、先生が1987年1月19日に急逝されたと岩佐先生から連絡が入った。

第1回道徳教育国際会議は博士の遺志を継ぎ、モラルジレンマ研究所で行われた（1987. 8.24～27）。私たちが発表した1主題2時間のジレンマ授業に内外の研究者の関心が高く、反響は著しく、私たちは自信を深めた^{注7}。

私たちの研究は心理学への偏りが強く教育学や哲学的な視点が弱いと考えていた。そんな折、教育学者の同志社大学佐野安仁教授がコールバーグ理論に造詣が深いことを知った。そこで同志社大学出身という気安さで連絡を取ったところ合同研究会をやるううと言うことになった。1986年11月に私たちの研究会と同志社大学佐野安仁教授と吉田謙二哲学教授を代表とする道徳教育研究グループとの合同研究会の1回目が立ち上がった。これを機に教育学、哲学、倫理学の側面からも積極的な理論検討や問題定義が加えられることになり、一層の研究の発展が期待できた。なお翌年、1987年は6回の集まり（最終が12.3）が2つの大学のあいだで持たれた。

こうして同志社大学とのつながりができ、神戸親和女子大学の山根耕平先生（同志社出身）とも出会うことになった。先生とは1987年8月24-27日にモラルジレンマ研究所の第1回道徳教育国際会議に出席した折、2つの研究会合同でノートルダム大学のバ

ワー教授や南イリノイ大学のハーミン教授を招いて佐野先生、山根先生、当時院生の林泰成（上越教育大学学長）、隈元泰弘（本学教授）さんを交えみんなでおそくまでビールを飲んで歓談した思い出がある。記憶が定かでないが1987年以前にも附属小学校のモラルジレンマ授業発表会に見えておられたと思う。山根先生とは片道1時間以内で行き来できる環境にあるので、その後私たちの公開授業研究会が行われると学生をつれてよく出席され、また夏期宿泊研究会や授業研究会では何度も話題提供や助言者となって頂いた。

先生は1989年第6回夏期合宿研究会（鳥取大会）と翌年の第7回宿泊研究会（京都大会）に学生と出席され、京都大会では基調講演（コールバーグ理論に基づく討論授業の授業技術を考える）をされた。神戸親和女子大学で山根ゼミ生、第8回の宿泊研究会兵庫大会に参加、その後兵庫教育大学大学院（兵教大院）を受験し、私のゼミに入り、院を1993年に修了された魚住知代さんは、今も現役の小学校教諭として活躍されている。

山根先生とはその後も公的に私的にいろいろな関わりがありました。1992年には山根先生より留学先について問い合わせがあり、岩佐先生と相談し、コールバーグ博士の高弟の一人、教育哲学者のトロント大学のボイド教授が適任との推薦をしました。その後、先生はトロント大学のオンタリオ教育研究所のボイド教授の元に留学された（1992. 8）。

その年の秋に、私は上寺学長から唐突に私の短期外在研究の打診があり、急に1993年2月から4ヶ月の海外出張が決った。在外研究を宮崎大学時代から毎年申請し、講座主任という理由で拒否され、半ば諦めていたので驚きであった。しかし山根先生と偶然時期を同じくして海外留学となったことに気をよくしたことを覚えている。記憶が薄れた今、「道徳性の発達研究年報、第5号、巻頭言」や「アメリカ・カナダにおける道徳教育－帰国報告」（荒木、1993）等を手がかりに簡単に当時を振り返ってみた。

（2）アメリカ、カナダでの短期在外研究

私の在外研究の目的は2つあり、コールバーグ学派のアメリカとカナダにおける道徳教育の動向をみることであり、今一つは、不安・ストレス研究について日米の間で研究連係を作ることであった。

①フロリダ州タンパにある南フロリダ大学のスピルバーガー博士（1991～1993年のアメリカ心理学会

会長）のもとに、40日間滞在（2/2～3/13）し、不安とストレスについて資料収集をした。

②カナダ、トロント大学オンタリオ教育大学大学院研究所、ボイド博士（教育哲学）のもとに滞在（3/14～4/3）。山根先生のアパートに同居し行動を共にした。ゲイトウエイ小学校、オタワ大学（ベランジャー教授）を訪問した。当時山根先生と同じ留学仲間の東北師範大学教授袁桂林氏を紹介された。

③インディアナ州サウスベンド、ノートルダム大学、パワー教授（認知発達道徳研究所）の元に滞在（4/4～4/19）。サウスベンド高校でジャスト・コミュニティの授業を見学した。聖職者の立ち振る舞いや感謝の姿を見て寄宿舎で生活する内、「善いことをしない訳にはいかない」といった心境になった。

④イリノイ州ミネアポリスのミネソタ大学でジェームス・レスト博士ご夫妻の元に滞在（4/20～5/8）。



James Rest博士とDarcia Narvaez博士
ご夫妻（1993.5.2）

宿舎から研究室まで毎日送り迎えをして頂き、感謝に堪えない。博士から研究の参考にと2冊の啓蒙書を頂

戴した。リコーナ著「Raising Good Children」とライマー・パオリット・ハーシュ、共著の「Promoting Moral Growth」である。後者は、荒木監訳で「ピアジェとコールバーグの到達点－道徳性を発達させる授業のコツ」として北大路書房から出版した（荒木、2004）。また2014年、Nucci、Narvaez、Krettenauer、共編の「Handbook of Moral and Character Education」が出版されたが、その18章で「An Application of Kohlberg's Theory of Moral Dilemma Discussion to the Japanese Classroom and its Effect on Moral Development of Japanese Students.」をヌッチ博士の依頼で執筆した。

異文化研究の一環として、Andersen School（少数種族重視小学校）の他、日本人学校を視察した。

⑤カリフォルニア州ロサンゼルス校（UCLA）、エヴァバーカー教授（教育評価研究所）の元、大学ゲストハウスに滞在（5/9～5/29）。UCLA附属小学校はデューイの実験校であり、当時の様子が

残っていると聞かされ訪問した。南カリフォルニア大学 (SUC) オニール教授 (不安、動機づけ、スピルバーガーの高弟) とも交流した。兵教大の同僚で長期在外研究員の畑野裕子先生 (ダンス教育、現本学教授) が既にUCLAに滞在。ゲストハウスに尋ねて見えたので、何かと力になって頂け、快適に過ごせた。畑野先生は英会話に堪能だったので、SUCのオニール教授との打ち合わせ等でご一緒して頂き大いに助かった。また院生の森川智之氏が異文化現地取材のために渡米して見え、行動を共に学校訪問や資料収集した。こうして、「国際化時代の教育に関する基礎的研究 - 異文化に対する態度と役割取得能力の発達の関係を中心に、1994年修士論文」が完成した。無事帰国し、私の在外研究は終わった。留守中家族が伊藤博之助手、山田勝則院生に大変世話になった。感謝。

Dr. Charles Spielberger Keynote Speaker at ICP Nikko Conference
By Machiko Fukuhara, Tokiwa University, Japan



On the occasion of the International Congress of Health Psychology held in Tokyo, Japan, July 26 - July 30, to which Dr. Charles Spielberger was invited as a keynote speaker, some ICP members convened in Nikko, July 31 - August 1 for a conference there. The meeting was a stimulating one, rather informal, but was basically academic and professional. Two speakers presented papers: one was on "STAI," prepared by Dr. Tadashi Hidano (Professor Emeritus, University of Tokyo), and the other was on "Children's Test Anxiety," by Professor Noriyuki Araki (Professor, Hyogo University of Education). Both of them dealt with the innovations of Dr. Spielberger, whose talks on these subjects were very much appreciated.

写真最後列がスピールバーク、その左前は祐宗広大、右前は肥田野東大、前列中央が福原常磐大、後方右後ろに岩脇兵教大各教授、前列左が筆者、

(写真) ^{注8}。

8月に帰国された山根先生から、ボイド教授が東北師範大学の講演を終え、カナダへの帰路、神戸親和女子大学に立ち寄ることを知らされた。そこで兵教大附属小でモラルジレンマ授業の参観を計画した。



帰国後、いくつかの研究交流が実現した。7月にはUCLAのスティグラー博士の依頼で日米の算数教育比較調査を手伝い、また8月1日にはスピールバーガー博士と日本の研究者と合同ストレス研究会を日光で開き、不安と怒りについて共同研究を詰めることができた

1年生対象の「ぼんたとリンリン (西前弘幸作、畑先生授業)」が終わると、教壇に立ったボイド博士が、思考



の限界を明らかにする高次の考え (体の大きさに合わせて1つの柿の実を分ける) はどうかと子どもたちに質問されたりし、モラルジレンマ授業についての私たちの考えを確認され、子どもの道徳的思考を生かしたよい授業だと評された^{注9}。写真は参観中の山根、



写真中央がセルマン博士

ボイド、畑野、荒木、通訳は畑野先生にお願いした。

1995年 (8/28~31) に第2回道徳教育国際会議

(21紀の道徳教育を求めて) がモラロジー研究所で開かれ、同志社から佐野、山根、林先生他、兵教大からは荒木、徳永、伊藤、堀田、上田、荊木、井原、今畑等13名の仲間が大挙して出席、発表した。パワー、ヒギンズ・セルマン博士、トロント大のベック教授と親交を深めた。また、この年の第7回日本教材学会 (日大芸術学部、1995.11.25) があり、シンポジウムで「阪神・淡路大震災と生きる感動を育む教材資料」が論議され、松原達也、荒木、鹿島和夫、岸本進一が話題提供した。<荒木の発表要旨… 1.17日未明に起きた未曾有の大震災を介して数限りない出会いとドラマあった。現実には生々しいので、震災の教材化は難しい。しかしこの時期でないと風化してしまうことも多々あろう。ここでは道徳教育の教材化可能性をモラルジレンマ授業を頭に描いて考える、と様々なモラルジレンマ資料を提供をした^{注10}。

この年、同志社心理学、秋田ゼミの3年後輩の倉戸ツギオさんが、同志社女子大を3月に辞職されていることを知った。阪神・淡路大震災で被災されたことで悩まれていたと人づてに聞いていた。何はともあれこのままでよい訳がない。そこで、山根先生に神戸親和女子大学に心理学の空きポストがあれば、倉戸ツギオさんを推薦したいと相談したところ、教授会の議を得て、翌年の1996年4月より児童教育学科教授として採用が決ったことを知らされた。

1996年には、来日中のカティーネス博士 (フロリダ国際大学教授) を道発研で兵教大に招き、「アメ

リカの道徳教育の最近の傾向：民主主義への教育」の講演をお願いし、畑野先生が通訳された(6.19)。また、日本教育心理学会38回大会のシンポジウムで、「教育の国際化による道徳性研究の課題」を内藤俊史氏の企画・司会で荒木が話題提供した(11/2)。

翌年1997年、来日中のニューヨーク大学の Hoffman 博士夫妻を招待し、兵教大で「共感性と道徳性の発達について」の講演会を持った(5.3)。

1998年、兵教大開学20周年研究大会で荒木が倉戸ツギオ(神戸親和女子大学)、奥村光太郎(兵教大院生、京都市立東養護学校)、榎原貴久(名古屋市立大須賀小学校)他を代表し、「心の教育・命を大切に教育に関する研究」について発表、3月に報告書を出した^{注11}。また1998年阪神地区道徳教育中学校部会研究大会で荒木が講演(猪名川町立六瀬中学校、11.25)した。

1999年、吹田市中学校道徳部会(横内環・三戸静子先生)との交流始まる。吹田市中学校道徳教育副読本「いきいき」が発行される。モラルジレンマ資料「僕にはいけない：最終決定、野口作」「本当のやさしさとは、丸山屋敏作」を掲載(3/31)。

第17回夏期合宿研究会(8/5~6)では、モラルジレンマ授業と総合学習のテーマの元に、山根教授による「カナダの小学校と総合学習」の発表や堀田先生が「ドイツの環境教育」等の情報提供があった。

2000年、正進社の要請で、中学性の道徳「道しるべ」の監修者となる。松尾廣文さんの支援に感謝。荒木は日教心・教材学会でそれぞれ、道徳教育に関するシンポジウムが開かれ、話題提供した。2000年4月から3年間附属中学校長に就任した。

翌年、同志社大学名誉教授佐野安仁先生に附属中学校で特別講演「コールバーグの道徳理論－公正共同体方式の重視－」を依頼した(2001.2.8)。2001年4月、神戸親和女子大学の倉戸ゼミから岩井美香さんと植松陽子さんの2人が兵教大院に進学された(荒木ゼミ)^{注12}。2年後の2003年3月に大学院を修了され、現在兵庫県と和歌山県で小学校教員として教職を続けられています。また2001年度から明石市立王子小学校との研究交流が始まった。2001年12月、水谷正樹先生指導によるPTA参加のモラルジレンマ授業を参観し、その斬新さに感激した^{注13}。

この研究は翌年開始された第1回日本道徳性発達実践学会で発表された(新しい道徳学習をめざして－地域の教育力を生かして－水谷正樹、2002.6.16)。

(3) 日本道徳性発達実践学会の設立

1984年に始まった兵庫教育大学道徳性発達研究会(道発研)の夏期宿泊研修会は毎年続けられていたが、2001年に第18回京都大会を京都教育文化センターの開催で終止符を打った(8/5~6)。2001年7月8日、兵庫教育大学道徳性発達研究会は新しい学会組織、「日本道徳性発達実践学会」として生まれ変わった(学会HPでも入会を呼びかけた)。総会の承認を受け、主な役員人事は荒木紀幸(理事長)；佐野安仁・吉田謙二(顧問)；山根耕平・松尾廣成・堀田泰永(副理事長)；倉戸ツギオ(学会誌編集長)と決った^{注14}。

2002年、第1回日本道徳性発達実践学会が神戸親和女子大学を会場に、トロント大学、ベック博士を招き、開催された(山根耕平大会会長、倉戸ツギオ事務局長)。記念講演は「道徳教育をカリキュラムと教室での生活にどのように統合するか」で通訳はみどり・ミラー氏であった(2002/6.16)。

また第2回大会(2002.8/3~4)を京都教育文化センターで行い、130人余りの参加者があった^{注15}。京都大学岡田敬司教授による基調講演は「他者の自主性を侵害しない教育はあり得るか？」である。岡山少年院の石井隆樹先生が「モラルジレンマ授業の可能性を矯正教育の現場から」と提案された。また、メール交換していた饒從満^{注16} 東北師範大学継続教育研究センター教授の記念講演、「中国における道徳教育の現状と課題」も行われた(事務局長、池永知宏、2002.8.3~4)。また、熊本大学での第43回日本教育心理学会大会に参加発表前に、荒木ゼミ一同(岩井、植松、池内、黒川、松田、池田、土井、野本、荒木)は、熊本県道徳性発達研究会(野口裕展主宰)に参加し、「なくしたかぎ」を授業参観した(授業者－森祥子・嘉島町立嘉島東小学校、2002.10.1)。

3. 神戸親和女子大学大学院の開設

「神戸親和女子大学創立50周年記念誌2016」によると、「神戸親和女子大学大学院文学研究科の設置」が2001.3.7の教授会での提案が承認、6月に「文学研究科、心理臨床学専攻・教育学専攻(修士課程)」の許可申請書を文部科学省が受理。教育学専攻教員に、福岡教育大学の林忠幸教授(教育哲学)、佐賀大学の丹野眞智俊教授(教育心理学)^{注17}を迎えることで、山根教授(教育哲学)、倉戸教授(教育心理学)含め、法令上必要な3名以上のマル合教員が確

保でき、2002年4月1日の開学となった、とある。1期生26名が大学院教育専攻に入学した。この1期生の大学院入学から、私が神戸親和女子大学大学院を去る2012年3月までの10年間の教育学専攻関連の資料を大学院開学10周年シンポジウムで配付した表に新たに資料を加えたのが表2である。この表を手がかりに、教育学専攻の当時の活動の様子を見ることにするが、荒木の専門、心理学に片寄った資料であることを最初に断っておく。

大学院が開学してまもなく、あの元気な倉戸ツギオ教授の身に病魔が襲って、半年後の2003年2月28日に倉戸先生がガンのため入院先で亡くなられた。教会葬儀で出席者を代表しお別れを述べたが、よく覚えていない。後日ナカニシヤ出版から先生と共著で「健康とストレスマネジメント」を出したが、「あとがき」に詳しく述べた。このような中で、山根先生から倉戸ゼミの竹田レイ子、福田美樹さん^{注18}の修論指導を正式に依頼され、附属中学校での校長職もこの3月で修了することもあり、異例な形であったが、4月から担当した。葬儀の席で倉戸先生の遺稿原稿を預かっているとナカニシヤ出版編集長宍倉弓高氏から聞かされた。急な出版となったが、倉戸先生の編集作業も進んでいたこともあり、無事出版できた（「健康とストレス・マネジメントー学校生活と社会生活の充実に向けて」荒木紀幸・倉戸ツギオ編、ナカニシヤ出版、2003.7発行）^{注19}。「倉戸ツギオ先生を偲ぶ会」が、神戸親和女子大学で山根学長の主催のもとに行われた（2004.2.29）。教え子や研究仲間、同志社の後輩、同僚、出版社、など多くの方が駆けつけられ、倉戸先生を偲んだ。

（1）東北師範大学と本学との研究交流

2003年4月、山根先生が4月に学長に就任された。饒従満教授から東北師範大学での講演について何度か問い合わせメールが届く中で、山根先生からは神戸親和女子大学への就任を打診された^{注20}。夏頃に神戸親和女子大学大学院への意志も固まり、東北師範大学と神戸親和女子大学との学術交流を教職員・学生との間で締結できないかを考えるようになった。この提案を山根学長、饒従満教授共々賛同され、三者の間で具体的な検討が始めた。私の中国行きの日程（2003.10／8～14）が決まり、両大学案をまとめる協定会議が10月10日と決まり、第1回留学希望学生との面接日が組み込まれた^{注21}。また第1回研究交流のため、袁桂林教授が、神戸親和女子大学の山

根耕平先生を訪れ研究され、饒従満教授が同行された。また兵庫教育大学の荒木の元では、社町立鴨川小学校の見学と吉川中学校（モラルジレンマ授業、長谷川珠里）を視察（2004.1／14～2／28）。また、東北師範大学留学生、崔玉瀾さんの学部編入学の許可と東北師範大学学長と協働研究推進で面談、大学、附属学校の視察のため、山根学長、井関眞欣学生担当教授と荒木が表敬訪問した（2004.9／1～5）

こうして両大学の研究交流が始まった。

（2）山崎教授と荒木の赴任

2004年4月1日、山崎英則教授（教育哲学）と荒木（教育心理学）が神戸親和女子大学に赴任した。

本学での大学院教育を行うに当たって、入学された院生にはできるだけ寄り添って、教育の質を高く保ちながら大学院教育を行おうと思っていた。また、兵庫教育大学での経験から、社会人学生や教育系コース以外の院生の中には、教育研究に必要な基礎知識や技術を身に付けていないまま入学されている場合がある。彼らには早い段階で、それらを身に付ける必要があり、そのためのカリキュラムが必要と考えていた。外国の文献に当たらなければならないことも今後あるかも知れない。そのためには、どのような対策ができるか等、あれこれか考えていた。また教育研究について多くを知るためには様々な学会の研究會に参加し、学会発表に行ける研究環境の整備も必要と考えた。カリキュラムの改革を具体的に始めたのは就任後3年を経た教育専攻科主任となった翌年、2006年であった。

2007年度大学院教育専攻科授科目の廃止と新設の提案によって、「国際理解教育特論」の廃止と「教育評価特論」と「教育研究法特論」^{注22}を新設し、「教育人間学特論」を「教育哲学特論」に名称変更し、「英書購読（教育学）、（心理学）」を新設した。こうして、新生のカリキュラムが動き出した。

表2は、開学から10年、2002～2012年の各年度毎に、5つの枠を設け、左から順に、「事項」、「本学での学会開催」、「教育講演会・学会講演会」、「院生学会参加発表」、「合宿研修会・見学会など」として、それぞれ特記される事柄を整理して載せた。

4. 2004年～2011年の教育学専攻科の特徴

（1）大学院研究紀要の発刊

特記すべきは、2005年、開学4年目で「大学院研究紀要」（創刊号）の発刊であり、編集委員の1人

としてとても嬉しい。投稿規定を見ると大学院担当教員、大学院修了者と在籍者、在籍者の場合研究指導教員と連名、その他編集委員会が認めたものと言う条件がある。第1巻は、単著、共著（院生と共同研究）、共著を合わせて原著8論文が掲載され、内5論文が院生の執筆（いずれも共同研究）である。この後2011年第7巻までの執筆状況は、2006年（8編）、2007年（16編）、2008年（11編）、2009年（10編）、2010年（14編）、2011年（10編）である。2007年がもっとも多く16編であったが、これは林、丹野両教授の定年退食記念ということが大きく影響したものと思われる。また修了生2人の実践研究が含まれていたことが意義深い。なお次いで多かったのは2010年の14編であり、この第6巻もまた、安藤、山崎教授の退職記念号という特徴があった。院生との共同研究が8論文もあり、院修了生1名の投稿論文を加えると、院生の投稿は盛況であったといえる。7年間の平均は1巻につき11編である。これが多いか少ないかを簡単に判断できないが、院生（M2）の定員（35名）の20%が投稿したとすると平均7人であり、積極的に院生が投稿していたと見てよいだろう。

（2）大学院博士課程設置構想

大学院研究紀要の表紙を構想するとき、将来の博士課程を意識し、サンキ印刷と荒木が協議を重ねて出来たものである。うす緑の落ち着いた色調を背景に紺の帯に白抜きの神戸親和女子大学大学院の横文字を配し、多くの研究を表わす緑の直線が未来に向けて伸びる構成となっている。このような色調の構図は、さわやかさ・聡明さ・厳粛さ、大学院をベースとした発展と意気込みを象徴している（表2）。

博士課程を設置するためには博士課程の学生を指導できるマル号教授が必要である。丹野真知俊教授の後任人事が始まる頃に、京都大学梅本教授の主催の言語学習研究会で院生時代からの研究仲間で、愛知教育大学副学長でこの数年来連合大学院設置の件で再三出会っていた多鹿秀継教授（教育学博士）が、候補者として頭に浮かんだ。説得は簡単でなかったが、定年を待たないで応じて頂いた。こうして2007年4月に本学に赴任となった。早々、博士課程設置準備委員会が発足し、2009年開設に向けて作業が始まった。多鹿教授が中心になって関係事務職員米谷さんが参加し荒木を含めて3人で、必要な資料（例えば、本学出身の博士課程進学者、他大学の修士課

程進学者、大学で非常勤講師を勤めるなど）を収集し分析し、カリキュラムの内容（例えば、教育学コース（10単位）と学校心理学コース（10単位）を予定）などを検討した（2月はじめから始まったこのような作業を重ね、何度も修正を繰り返し、2008年6月28日に、多鹿教授が、「神戸親和女子大学大学院発達教育学研究科（博士課程）設置構想（案）」を提出された（A4 11頁）。しかし、8月にリーマン・ブラザーズの経営破綻が報じられ、間を入れず山根学長から親和学園の経営危機を伝えられ、博士課程設置に難色を示された。この後、親和学園田村理事長が3月で辞職され、2009年4月、山根学長は親和学園理事長に就任された。また博士課程設置についても中止が決った。それでも博士課程設置への望みを将来に託して、山崎教授の後任人事では、博士課程で教える資格を持つマル号教授、森川直岡山大教授（教育哲学、教育学博士）を推薦した。森川先生とは兵庫教育大学連合大学院学校教育方法講座の正副議長をして長年行動を共にしており、その手腕を発揮して頂きたく定年を待ってお願いした。森川教授、多鹿教授が在職中に博士課程が実現せず、残念であった。今後に期待したく、設立を念じている。

（3）修士課程院生の入学、修了動向（1～7期生）

開学した2002年度入学生は、20名定員を6名を超える26名の入学があったが、その後定員を割る状況が続いている。3期生以降の入学者数は不明である（表2）が、修了者の数を見ると、4期生までは12～13名であった。しかし、5期生からは転化の兆しが見られ、修了生15名と増加を見た。6期生で定員充足に近づき（18）、8期生で19名とほぼ定員となった。しかし9期生の修了者は13名と減少している。大学開学50年誌には、大学院は、現在、入学生の減少にどのように歯止めをかけるかという課題に直面しているとある。そして、2016年度の入学者数は、教育学専攻で4名と伝えている。少子化が進んだ今日、教育学専攻の定員20名が適切かどうか考える時期にあるのかも知れない。兵庫教育大学時代の教育方法講座の規模を考えると、定員は10～15名程度が適当といえるのではないかと。

（4）本学での学会開催

本学大学院の山根、倉戸教授が日本道徳性発達実践学会の役員に就任され、神戸親和女子大学での第1回大会が開催された。記念講演には山根教授と親

交の深いトロント大学のベック博士が登壇された(2002. 6.16)。

本学での2回目の開設は2004年の日本教育実践学会第7回研究大会である。この学会は兵庫教育大学連合博士課程の4大学が中心になって作られたが、学会の発足時から役員として荒木が関係していた。そこで誘致をお願いした。山根学長が大会委員長、事務局が荒木で開催した(2004.11 / 20-21.)。本学からは、福祉・障害児教育研究所主催、「シンポジウム」テーマ(特別支援教育にどう取り組むかー神戸市の実践を中心にー)を安藤忠教授を司会に、話題提供;中尾繁樹、田中潔、井澤信三、堤莊祐教授、が提供された。自由研究発表で丹野教授や荒木、院生7名が発表した。このように多くの親和関係者の参加により、所期の学会開催の目的の一部は達せられたものと考えられる。記念講演は梶田叡一京都ノートルダム大学学長(中央教育委員会委員)であった。

多くの院生は大学院に入って研究を始める。学問の世界を知る早道の1つは学会に参加し発表することであり、また学会の仕事を手伝うことである。そのことが意欲と自信になる。学会では専門を異にする研究者や他大学の院生との出会いがあり、コミュニケーションを交わすことのメリットは大きい。しかし、学会誘致は難しく、在籍中に開催できたのは理事長を務める日本道徳性発達実践学会の3回のみであった。しかし、院生の発表参加は多かった。また院生の積極的な協力で大会が運営された。日本道徳性発達実践学会大会はその後、2006年の第6回大会、2007年の第7回大会、2011年の第11回大会まで本学で行われた。各大会では、本学院生の発表参加が多数見られ、準備委員の名簿にも院生の名前が多数掲載されるようになった。

(5) 本学大学院提供の教育講演会・学会講演会

様々な知の世界に触れることは研究を志す人にとって血となり肉となって働く。私たちが院生のために用意した様々な分野の講演会を表2に示した。私の記憶をたどると、山根教授が指名された講師先生には、トロント大学クライブ・ベック博士(道徳教育をどのようにカリキュラムと教室での生活に統合するか)、和田雄二仏教大教授(子どもの人間学の今日的意義)、バム・サモンズ(効果のある学校教育)ノッティンガム大学教授、大迫弘和同志社国際学院初等部校長(世界の思いやり教育ー国際バカロレアの実践から)、等があげられる。丹野教授は京都大

学苧坂直行教授(オノマトペと大脳辺縁系)、筆者が担当した学内講演では、梶田叡一教授の「研究者は実践現場にどう貢献できるか?」、竹下和男(高松市立国分寺中学校)校長先生の「心の空腹感と弁当の日」、石隈利紀筑波大教授の「寅さんと浜ちゃんに学ぶ助け方、助けられ方」、榎本博明名城大学教授の「自己のアイデンティティの発達と教育」、ラリー・ヌッチ招聘教授(カリフォルニアパークレー校)の「アメリカの道徳教育」、大学院教職科目(道徳教育の研究)で特別講義(2008. 6.24)として、また、ラリー・ヌッチ招聘教授(カリフォルニアパークレー校)の「これからの道徳教育への提案」、2010.11.20等がある。このように、講演は、学内で開かれた一般的な講演だけでなく、大学院の教育学専攻科生対象の講演、大学院の特別授業での講義等、院生のために限定した形の講演もいくつも用意されていたと意味では、私たちが計画し用意した講演はそれぞれに意義あったものと考えられる。

(6) 本学大学院生の学会参加、学会発表について

ここで取り上げた本学院生とは荒木ゼミの院生が主であるが、心理臨床学専攻の院生、院修了生、あるいは他のゼミ院生と共に参加した学会もある。そのことをまずお断りする。

本学院生の学会参加発表は、筆者が本学に赴任する1年前から始まっている。亡くなられた倉戸ツギオ研究室のゼミ生、竹田レイ子、福田美紀のお二人を院生指導し、竹田レイ子さんが、2003年5月、日本道徳性発達実践学会第3回京都大会で「学校生活を充実させるための教師の支援を考える」を発表された。またお二人は学会事務局スタッフとして学会運営に携わった。

この後、2010年まで毎年、46回大会から始めて、第52回までの7年間、荒木ゼミの院生は日本教育心理学会大会に出席し、それぞれが学会発表をした。そして、この成果は修士論文に反映し、学会誌での論文発表、本学大学院研究紀要での論文発表、その他の研究報告書、等での発表に繋がっている。本学大学院研究紀要を調べると、私との共同研究は、第1巻では、1名、第2巻では1名、第3巻では、1名、院修了者の共著1名、実践研究単著1名であった。第4巻、3名、第5巻、1名、第6巻、1名、院修了生単著1名、第7巻、1名であった。私の客員教授退任の年に発行された(2012年3月)第8巻では、私の単著と共著1名であった。この在職した

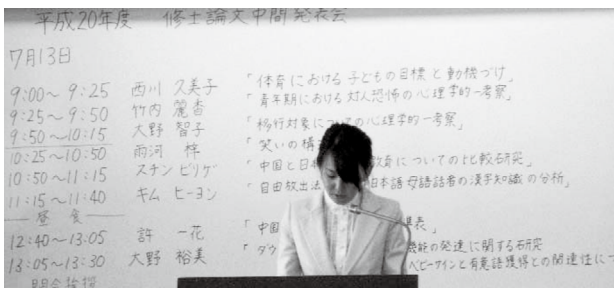
7年の間で、大学院研究紀要の執筆を見ると、院生との共同研究が10編、院修了生の単著が2編、院修了生の共著が1編であった。

また学会誌、「道徳性発達研究」では、2007年第2巻で筆者との共著が1編、2009年第4巻、1編(翻訳)、2011年第6巻で筆者との共同研究が1編、2012年第7巻、院修了生の単著1編が報告されている。

この他、荒木紀幸編著「不安やストレスを下げ、自尊感情を高める心理学—学校生活を充実させるために、あいり出版」では、院修了の泊誉子(7章2を担当)、山中真実(10章を担当)の研究が取り上げられ、また、「あとがき」で崔玉瀾さん他の中国での研究が紹介されている^{注23}。

(6) 院生との合宿研修会、見学会などの行事

ゼミ生、あるいは研究仲間が互いの研究を共有し、研鑽を深め合うことを大切に思って、同志社時代から筆者は実行していた。例えば、院生時代に先輩、後輩関係の三人が、1週間にそれぞれの専門分野の英語論文1本を読み、その要約を持ち寄り、それらを紹介・議論することを2年間近く続けたことがある。この経験は宮崎大学教育学部でも生かされた。教育実習が始まる前に「激励会」、終って「実習報告会」を行うことが慣例になり、ゼミの演習が「ゼミ合宿」となった。兵庫教育大学では、院生の修論中間発表会を前に、夏期休暇を利用して「合宿研修会」を主に毎年、「三田学生セミナーハウス」で行った。本学赴任前の荒木ゼミ合宿(学部生・院生)も学生セミナーハウスであった。本学でも機会を見て「ゼミ合宿」と考えていたが、5年目の2008年にそのときが訪れた。教育学専攻院生を対象に中間修論発表



をかねた1泊2日の合宿研修会を「しあわせの村」で行った。写真は発表の様子である。緊張が伝わって来る。院生さんは殆どが初めての経験ということや留学生が多いことなどで、けんけんガクガクとはならなかった。しかし発表者の貴重な体験を聞けることもあってそれぞれが真剣であった。先生は研究

方法での問題点や別の観点で質問されたり、日本と違った文化的な課題を聴いて驚いたり、双方に興味のある会であったと考えた。適度の疲労を持って散会となった。終わりの集合写真の笑顔を見ると、主催した側の者として、やってよかったと思った。また有り難いことにこの宿泊合宿に掛かった経費は大学に殆ど賄って頂いたと記憶している。



大学院教育学専攻生合宿研修会(しあわせの村:1008.7.12-13.)
31名参加:前列左から本間俊宏、安藤忠、荒木紀幸、左側に多鹿秀継、その後方に山本順彦、最後列に山崎英則の各教授。この合宿では、2日間に渡って平成20年度修士論文中間発表会(18名の院生による、発表時間15分、質疑応答10分の進行)と講演会(スタンフォード大学留学で学んだこと:中植正剛講師)が行われ、貴重な体験を醸成した。

しかしながら、この教育学専攻合宿研修会は必ずしも筆者が思うほど、院生には好評でなかったようである。翌年は学内で従前からの形で行われた。荒木は退職を前に荒木ゼミの最終合宿研修を2010年、三田学生セミナーハウスを使って行った。院生9名と荒木の計10名が参加し、有意義な時間を過ごした(9.25~26.)。

イチゴ狩り、王子動物園、森林植物園、神戸ルミナルエへの参加(サテライトの授業を15分前倒しで終えた)は入学した院生同士の親睦を意識したものである。また、交野女子学院の見学を考えたのは、本学大学院の修了生の就職先の1つとして、教育学や心理学の専門を生かした法務技官の職があると考えたことである。ゼミ生の中に少年鑑別所の技官がいたことでこの見学が実現した。

5. まとめ

神戸親和女子大学大学院に赴任したことで、兵庫教育大学ではできなかった研究が院生との出会いの中から様々に現れ発展した^{注24}ことを感謝し喜ぶたい。また、院生の多くが日本道徳性発達実践学会や日本教育心理学会の研究大会に参加し、個人発表、共同研究すると共に、現地で様々な体験をしたことが懐かしい。富山大会では帰路白川郷を見学した。

文教大学での研究発表では車椅子の院生が一緒だったので、これまで気がつかなかった問題に何度もあい、憤ったことがあった。また院生と共著で学会誌、大学院紀要へ投稿を継続して行なえたこと、院修了生が共著、単著で書籍発行したこと、大学院としての研究の質の向上に寄与できたものと思う。学校心理士については、「学校心理士」資格取得科目を整備し、学会開催時では「学校心理士研修会」認定セッションを用意し、院生の求めに応じてスーパーバイザーとして人物証明書（推薦状）を書いた。こうして、院生は大学院を修了し、小学校教諭、幼稚園教諭、専門学校や大学の教員、研究者、学校カウンセラーなど、専門性を生かし、幅広く活躍されておられる。

文献

- 荒木紀幸編著 1988「道徳教育はこうすればおもしろい - コールバーグ理論とその実践」北大路書房
- 荒木紀幸 1993 道徳性の発達に関する研究年報 1993年度版（第5号）1-5, 49-54.
- 荒木紀幸、倉戸ツギオ、奥村光太郎、榊原貴久、佐藤孝弘、宮瀬弘吉、佐々木寿洋、淀澤勝治、北井良、鈴木憲 1998「心の教育・命を大切にすることに関する研究」平成九年度兵庫教育大学教育改善経費（学長裁量経費）研究成果報告書 兵庫教育大学 荒木紀幸研究室 A 4 版全133頁。
- 荒木紀幸 2011 青年版テスト不安検査（TAI-J）に関する研究 神戸親和女子大学研究論叢（44）, 69-76.
- 荒木紀幸 2022 わが国におけるモラルジレンマ授業に関わる理論、実践、及び教材についての文献総覧（1968～2020）道徳性発達研究 第15巻 第1号 37-38.
- 荒木紀幸 2023 新島襄の考えた良心教育とコールバーグの道徳性発達段階 道徳性発達研究 第16巻 第1号 46-60.

註

1) 開学に伴って1981年に兵庫教育大学に移動する予定であった。しかし、1979年5月～翌年2月まで京都大学梅本堯夫教授のもとで内在研究員として出張勤務していたことを理由に、移動が1年間伸ばされ、1982年4月の赴任となった。なお初年度の担当科目は1981年の夏期集中授業となった。

2) コールバーグ理論に係わる修士論文の第1号は吉田重郎氏の「コールバーグ理論を用いた道徳教育の研究－モラルディスカッションの教室への適用」である。

3) 教育方法講座の構成員の教授、助教授の先生方は私たちの研究に理解を示し、温かく見守って頂けたので、トラブルもなく好きなように仕事が出来た。また現職の院生の年齢は全体に高く、私の年齢を遙かに超える人がいて、それぞれに意欲的あり、それが自分にとって大きな刺激となり、励みとなった。

4) 研究を始めた1970～1980年代の研究会の活動の詳細については、荒木（2020）なぜ本のタイトルは「道徳教育はこうすればおもしろい」なのか、道徳性発達研究 第14巻、第1号、22-32.を参照されたい。

5) 膝を交えて時間をかけて研究交流したいと河原第一小学校の滝田修先生の希望が出て、第9回鳥取県小学校道徳教育研究大会（10.26）に向けて合同の宿泊道徳研究会の第1回（1984. 8.21～22.）を行った。その後、河原第一小学校との共同研究は毎年続けられ、1988年出版の「道徳教育はこうすればおもしろい」に繋がった。

6) コールバーグ博士の来日は道徳教育関係者の間で大きな話題となり、雑誌「道徳教育、明治図書」も、1986年1月号に「コールバーグ理論と道徳授業」特集を90頁に渡って取り上げた。コールバーグの翻訳本が次々と出版され、コールバーグフィーバーが起こった。

7) 荒木が「コールバーグ理論に基づく小学校・中学校での道徳の授業とその効果、8/27」を発表し、ポスターセッションでは鈴木憲が「道徳性の発達に及ぼす役割取得に関する研究－多角的思考トレーニングに基づく役割取得能力の変容、8/25」、徳永悦郎が「兵庫教育大学附属小学校における道徳性の発達を考慮した道徳教育の実践、8/25」を共同研究として発表した。

8) この会議の中でSpielberger博士が提案された、①日本版State-Trait Anxiety Inventoryの開発は、新版STAI状態-特性不安検査（STAI-Form-JYZ）－肥田野直、福原真知子、岩脇三良、曾我祥子、Spielberger, 2021）として結実、②Spielberger作のテスト不安は、日本版「青年版テスト不安検査（TAI-J）」と公表された（荒木、2011）。

9) このときの様子は、「モラルジレンマ授業の教材開発（荒木、1996、明治図書、145-147.）」に詳

しい。

10) 話題提供の内容については、「道徳性の発達に関する研究年報 1995年度版(第7号)」、学会活動報告②-5(pp.123-132.)に詳しい。また、モラルジレンマ教材については、「モラルジレンマ授業の教材開発(荒木、1996, 明治図書、6.阪神大震災を扱ったモラルジレンマの作成の試み、pp.134-138.)」を参照ください。

11) この研究プロジェクトで、研究1で子どもがどのような生命観をもち、いかに発達するかを道徳性の発達から明らかにし(奥村)、研究2では「生や死」に対する感性を育てる方法を体験や実践を中心に資料収集する(倉戸)。研究3では、「生命準備教育」と「死の準備教育」の方法をモラルジレンマ授業から検討する(鈴木憲)。

12) 二人は荒木と倉戸と連名で、それぞれ上越教育大学での第4回日本教育実践学会(2001.11.11)で口頭発表した。○岩井美香・荒木紀幸・倉戸ツギオ「学校ストレスについて認知的評価から探る～学業評価、学業内容の尺度研究」；○植松陽子・荒木紀幸・倉戸ツギオ「学校ストレスについてストレス過程から探る－対人関係(学校生活における対人関係、家族関係)の尺度研究」

13) 水谷正樹西宮市立山口小学校はPTA会員人形劇(図書ボランティア)グループによるジレンマ(加藤健志原案、道徳性発達研究会作、ゆき子さんの日記、モラルジレンマ資料と授業展開,p.48-49.)の提示と人形と子どもとのロールプレイという保護者を巻き込んだ新しいタイプのモラルジレンマ授業を行った(12.13)。

14) 学会誌編集長にお願いした倉戸ツギオさんは同志社秋田清ゼミの3年後輩である。これまでの研究歴や実績から道徳性の発達という新しい学会誌の編集責任者として役割を果たして頂けると考えてお願いした。これまで心理学書を出版する際共同執筆者になって頂いている。それらには、「わたしがわかる・あなたがわかる心理学(1987, ナカニシア出版)」、「生きることの心理学(1993, ナカニシア出版)」、「総合学習で育てる知識・能力・態度－教育心理学による解明(2001, 明治図書)」等である。

15) 「日本道徳性発達実践学会第2回京都大会」には神戸親和女子大学大学院の関係者が山根、倉戸教授を含め、8名の方が参加されていた。

16) 饒従満教授はメール交換で、日本の道徳教育の現状や動向に関心をもって日本の大学をよく訪問し

ていることや、これまでにモラルジレンマ授業に関する私の著書を何冊も購入されていると伺っていた。

そこで、訪日中を利用して、この学会に参加、発表することをお願いした。大会終了後、中国に帰国後に饒従満先生より次の論文が届いた。「饒従満・李宏平(2002)“1主題2時間の道徳教育、教授過程における2つの難しい問題”、外国教育研究、第29巻12号(道徳性の発達に関する研究年報 第14号研究年報所収121-126.)」、そしてメールで、東北師範大学に招待したい旨の連絡があった。私は現在中学校の校長を兼務しているので都合がつかないが、校長を終えた(2003.4)以降だと可能だと返信した。

17) 丹野先生を親和に迎えるという話を山根先生から聞いた。そのとき、丹野先生との出会いが楽しみだと思った。それは、宮崎大学時代九州心理学会に属し、助教授の頃から宮大代表になってその運営に関わっていたので、丹野先生と会議でご一緒することがあった、また、丹野先生は「オノマトペ」、私は「言語連想」と研究領域がかぶることがあって、日本心理学会や教育心理学会で発表会場が同じということがこれまで何度もあった。

18) 福田さんは同志社大学大学院博士課程に進学、竹田さんは研究生として荒木ゼミで2年間研究を継続。その後はスーパーアドバイザーとして活躍された。

19) 共同執筆者；大竹恵子・島井哲志(第1章)、山崎勝之・松村亨・今井恵美子(第2章・第3章)、倉戸ツギオ(第4章)、荒木紀幸・山田良一・平井和夫(第5章・第6章)、村上千恵子(第7章)、中西龍一(第8章)。

「あとがき」で荒木は倉戸先生との関わり、出版の契機になった「応用心理学会における公開シンポジウム」、そして、痛みに耐えての授業やゼミ指導について書いた。

20) 兵庫教育大学では私の指導を望む現職の院生がおられ、一緒にやりたい仕事もあった。また兵庫教育大学連合大学院教育方法講座議長としても博士課程院生の指導に意欲があったので、定年を待たずに神戸親和女子大学に移ることに躊躇があった。ただ竹田レイ子さんや福田美樹さんの修論指導や授業で他の院生さんに接する機会が増え、大学の将来の夢について山根先生から話を伺う中で神戸親和大学大学院での活動に傾いていった。

21) 会議では両国の研究交流に関する提携と学部学生の交流プログラム(編入等)最終案を決め、調印

方法話し合った(2003.10.10)。袁桂林教育研究所長から共同研究第1号に、「モラルジレンマ授業を通じた道徳教育比較研究」を政府教育部と文科省に申請する。共同研究先と時期(神戸親和大学山根教授、2004年2月1日～3月19日と兵庫教育大学荒木教授、3月20日～3月30日)の提案があり、承諾書を後日返送することとなった。出席者は東北師範大学から楊副学長、安国際交流副部長、饒従満教育



研究所副所長の3人と荒木の4人で話し合った。山根学長と袁桂林教授がカナダ留学仲間であったことや饒従満教授が大学間の橋渡しをしてくれたこともあって、会議は終始和やかだった。袁桂林教授はその後来日し、共同研究を行った。

また、東北師範大学の学部生で留学希望者がいることは前もって知らされていたが、会議後に面接する運びとなり、荒木が崔玉瀾さんと面接した。崔玉瀾さんは第1回交換留学生として2004年9月に来日、学部3年生に編入(私のゼミ所属)、1年半を教育心理学を中心に学び、2006年2月に学部を終え(2005年4月に東北師範大学を卒業)、2006年4月に本学大学院教育学専攻に入学した、修士論文(中国吉林省長春市小学生における学校内不安と自尊感情に関する研究)を提出し、2008年3月院を修了、本学の職員として国際交流の仕事に従事されている。

22) この授業では、広く学校教育に関わる教育研究を進めるにあたって必要とされる方法論の基礎と応用を演習形式も含めて実施する。具体的な内容として、「教育研究の進め方、まとめ方」として、研究計画の立て方、文献検索の方法、実験法、調査法、統計処理に関すること、修士論文の書き方、研究者の心得、研究上のモラル、倫理の問題、を最初に講義し、各論として、心理検査法を中心に、教授学習過程・授業分析・授業評価法、態度調査法、測定・尺度法、生理的測定、学習・記憶研究等、を講義する。荒木が担当する。「教育評価特論」の担当は来年4月就任予定の多鹿秀継教授。英書購読特論、(教育学)の担当は山崎英則教授、(心理学)の担当者は多鹿秀継教授である。

23) 「あとかぎ」から、……東北師範大学から交換留学生として来日した崔玉瀾さんが中国吉林省の小学生を対象にテスト不安と学校内不安の研究を行っ

たことを手始めに、中国の子どもたちについてのウエルライフ研究が盛んになっています。例えば、蘇州大学の黄辛隠教授の指導のもとに小学生と中学生を対象とした2つの修士論文が今年(□丹丹)、昨年(林静)と発表されています。2つの修士論文は私たちが扱うことができなかった親の経済状態と不安の関連について検討しています。いずれの研究についても、小学生の場合も中学生の場合も貧困家庭ほど子どもの学校内不安水準が高く、経済的に豊かな家庭ほど学校内不安が低いという結果を明らかにしています。現在、神戸親和女子大学大学院生で現在進行中の研究には、ゼミ院生の薛菁さんの「中国揚州市の小学生における自尊感情の研究-学校内不安、学業成績との関わりを通して-」、賈師さんの「中国の大学生におけるストレスと自尊感情の関連についての研究」、劉暢さんの「小学生における学校内不安とやる気のない子どもについての研究-中日両国学習意欲のない子どもの比較研究-」があります。どのような結果が得られるか、来春の修士論文完成を楽しみにしています。このように中国の子どもたちを対象とする取り組みが増えています。これらの研究が実を結び、中国の子どもたちの学校生活の充実と幸せにつながればと願っています。本書は神戸親和女子大学2010年度出版助成を受けて完成することが出来ました(B5判全261頁)。

24) 1つ例をあげれば、1期生の竹田レイ子さんが神戸市立小部小学校3年生の学級で行った1主題2時間のモラルジレンマ授業、「門番のマルコ(堀田作)」がフジテレビ系の道徳教育再生プロジェクトで「道徳教育の切り札-モラルジレンマ」として取り上げられ(2006.11.10放映)、視聴者の反響の大きさが話題となり、多くの識者の関心を呼んだ(荒木、2022)。